

# 志の寺

瑞龍寺・北海道場百年史話

松本 篤二

# 志の寺

瑞龍寺・北海道場百年史話

松本 篤二





# 志の寺

瑞龍寺・北海道場百年史話

松本 篤二

# 志の寺

瑞龍寺・北海道場百年史話



# 志の寺

瑞龍寺・北海道場百年史話

『志の寺―瑞龍寺・北海道場百年史話』

目 次

はしがき

7

『志の寺―瑞龍寺・北海道場百年史話』刊行に寄せて

大圓山 瑞龍寺 第五世住職 皆川 彰久

12

『志の寺―瑞龍寺・北海道場百年史話』の発刊を慶ぶ

松島瑞巖寺 第一三〇世住職 吉田 道彦

14

『志の寺―瑞龍寺・北海道場百年史話』の発行に思う

臨済宗妙心寺派宗務総長

東京世田谷 龍雲寺 住職

細川 景一

18



### 第3章 無住苦悩の十七年

- 1節 総論と二代松本菊次郎の苦悩
- 2節 相沢龍潭師
- 3節 佐々木承周老師

299 300 320 334

### 第4章 加藤隆芳老師（兼務）とその時代

- 1節 総論と加藤隆芳老師
- 2節 北海禅道会の再建と  
書院・坐禅堂「瑞雲軒」の建立
- 3節 別院「瑞芳寺」の建立

353 354 385 399

### 第5章 遠山限り無き碧層々——中川祖臨老師の挑戦

- 1節 総論
- 2節 中川祖臨老師
- 3節 北海禅道会
- 4節 松本宗芳と瑞龍寺

409 410 432 452 463

### 第6章 平野宗浄老師（兼務）と吉田道彦老師（兼務）

- 1節 総論
- 2節 瑞龍寺花園会の発足
- 3節 花園会結成記念行事と瑞龍寺梅園・臥龍梅
- 4節 『聖僧 盤龍老師逸話集 瑞龍寺版』の刊行

473 474 490 510

### あとがき

517

### 主要参考文献

523



図97 瑞龍寺本堂に立たれる管長猥下



図98 瑞龍寺本堂における『披露晋山式』



図99 待ちかねた檀家と共に記念写真

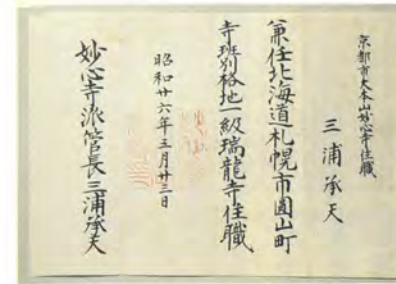


図100 珍しい辞令 めったにありえない辞令である 瑞龍寺なればこそであろうか

話は若干余談になるが、これに関連して瑞龍寺には、瑞龍寺以外にはめったにありえない文書が残されている。それは京都の妙心寺住職である三浦承天老師を、札幌の瑞龍寺の兼務住職に、妙心寺派管長の三浦承天老師が発令しておられる辞令と、そのことの証明書である。昭和二十六年（一九五二）五月二十三日の日付になっている。図一〇〇

## 佐々木承周老師の誕生

管長就任に先立つ二年前、承天老師は昭和二十二年（一九四七）に佐々木承周和尚を印可しておられる。注40 注41

注40 財団法人 仏教伝道協会 『第30回仏教伝道文化賞』 平成八年

注41 The Zen of Myoshin-ji Comes to the West 25 Years of Joshi Rōshi in America 1962—1987

承周和尚は、承天老師が瑞龍寺の住職として育てられた最初の弟子である。瑞龍寺で育たれたお弟子の中から、老師の法嗣が誕生する、これは瑞龍寺にとってもこの上なく喜ばしいことであった。

この三年前、昭和十九年二月に佐々木承周和尚は瑞巖寺の副司に就任している。加えてこの度の師家誕生である。そしてこのことが、後の承天老師の管長ご就任を可能にしたといえるのである。すなわち承天老師は、副司である承周老師に瑞巖寺の留守を委ね、また法嗣である承周老師に瑞巖寺僧堂の師家代行も任せて、安心して京都の本山住まいに入ることが出来になったのである。

一方瑞巖寺では、明治年間から本堂・御成門・中門・庫裡・回廊が国の特別保護建造物に指定されている。注42 これが国からの助成も貰って、大修理を行わなくてはならなくなっていた。いわゆる「昭和の大修理」である。これも副司の佐々木承周老師に課せられた大きな責任であった。

注42 『瑞巖寺の歴史』堀野宗俊著 瑞巖寺刊 平成九年



## 『瑞巖寺事件』

ところが承天老師が管長に就任して満二年が過ぎ、三年目に入って間もない昭和二十七年（一九五二）二月、とんでもない大事件が起きる。瑞巖寺の副司である承周老師が、事件に関わって刑事訴追を受けてしまわれるのである。世に言う「瑞巖寺事件」である。事件の内容については、今日瑞巖寺に記録が残されていないので不明であるが、上記「昭和の大修理」のために国から授かっていた資金の、管理責任を問われたもののようである。

これに対して承周師は、すべてを自分の不徳の致すところとのみ答え、すべての罪をご自分のこととして認めてしまわれた。このため承周師の弁護を予定しておられた寺務局の方々も、弁護の余地がなくなってしまうととき。また承周師は、収監中は固い床の上で一日中結跏趺坐（けっか

ふざ）坐禪を組むときの坐り方）をしておられて刑務官を感じさせ、また見

かねた刑務官からは座布団を差し入れられたとも聞いている。注43、注44

注43 宮城県塩釜市 東園寺 千坂成也師談

注44 宮城県仙台市 大梅寺 星智雄師談



図101 『The Zen of Myoshin-ji Comes to the West』 米国臨済寺によって編集・発刊された、佐々木承周老師布教25周年記念誌

しかし住職を本山の管長として送り出すことは、瑞巖寺にとっても、何かと有形無形の資金が必要となることであつたのは当然であろう。しかも瑞巖寺自体、明治の疲弊から立ち直ってきたとは言っても、現代の瑞巖寺に見るほど豊かな寺には程遠い状況であつたこともまた事実であつた。そんな中で副司を勤めなくてはならなかつた承周老師のご苦勞

の偲ばれる事件だつたのではなからうかと、筆者は考えている。

この事件の第一報が承天老師のお耳に入つたとき、老師はいつの間にか本山に居られなくなつていたという。小方丈（＝管長の居坊）には勿論、本山妙心寺のどこを探しても、管長猊下の姿はなかつた。本山妙心寺が管長猊下を探して上を下への大騒ぎになっている頃、承天老師は既に瑞巖寺に戻っておられたのである。あとに管長としての辞表を残しておられたことはもちろんである。かくて三浦承天老師は、妙心寺派の管長を退任されたのである。老師満七十九歳のときであつた。後任は、古川大航老師が継がれた。

承周老師はこの後、古川大航管長の計らいで渡米されることになる。『アメリカにおける妙心寺派の禪の布教』が老師に課せられた課題であつた。この後承周老師は、アメリカでこの課題を精力的に果されていく。注45

注45 The Zen of Myoshin-ji Comes to the West（前掲）

生活も常識も言語も異なる人たちの中で、どうやればそのようなことが可能であつたのか、不思議とさえ思われることであるが、承周老師の、他人に優れた精神力と智慧が、多くの米国人をひきつけたのであろう。その布教の広まりは、アメリカに止まらず、カナダ、ヨーロッパ各国、ニュージーランドにまで拡がり、地球規模ともいえるものを実現されるのである。まさにその努力と成果は目を見張るものがあり、ついに平成八年三月には、「日本仏教伝道協会」の「仏教伝道功労賞」



### 三節 佐々木承周老師



図165 佐々木承周老師

札幌瑞龍寺で三浦承天老師の弟子に

佐々木承周老師は明治四十年（一九〇七）四月二十一日、宮城県大和町鶴巢の農家に生まれた。承周師の母が、宮城県塩釜市の名刹東園寺の先々住秀峰和尚の実家である千坂家の出であり、現住職千坂成也師の祖父と承周師とは従兄弟になるという。注<sup>1</sup>

注<sup>1</sup> 宮城県塩釜 東園寺 千坂成也師談

この東園寺のお世話だったのであろうか、十四歳のとき承周師は、志を立てて北海道に渡り、札幌の瑞龍寺で三浦承天老師の弟子となる。大正十年（一九二一）のことである。札幌の瑞龍寺に着いたのは四月八日、すなわちお釈迦様の誕生の日であった。承周少年はこの日に入寺するべく、あらかじめスケジュールを考えていたという。注<sup>2</sup> 佐々木承周という方は、十四歳で既にそのような考え方の出来るタイプの人であった。

注<sup>2</sup> The Zen of Myoshin-ji Comes to the West 25 Years of Joshu Roshi in America 1962—1987

この時瑞龍寺には、成年の僧四名と承周師と同年輩の若い修行僧（学徒）二名がいたと承周老師

は語っておられる。注<sup>2</sup> しかしその記録は瑞龍寺にもないし、松本家の伝承にもない。大正十年というこの時期、瑞龍寺にそれだけの人員を抱えるゆとりがあったとすれば驚きである。記録に残る中では、承周師は瑞龍寺での承天老師の弟子の第一号である。

しかし承周老師は、このときのことを面白い話で語っておられる。注<sup>2</sup>

・・・茶会が終わると師は立ち上がり、鋭いまなざしで僧侶たちを見回して言いました。「今日はあなたたちに質問はしません。学徒たちに訊きます。」私は最初に質問されるのではないかと緊張しましたが、師が「この寺に入った順に訊いていきます。」といったので、自分は最後だと知ってほっとしました。師はこう尋ねました。「お釈迦様の歳は何歳ですか？」最初に指された人は、「二五〇〇歳です。」と答えていました。自分の答えを考えるのに必死で、二人目の答えは覚えていません。

どんなに考えてもよい答えが浮ばなかったので、とにかく自分の番になったら最初に思いついたことを言おうと思いました。師は私に「お釈迦様の年齢は？」と尋ねました。「私と同じです」ととっさに答えると、師は他の僧を見回し、それから私を指さして言いました。「この若者は明日から坐禅の修行を始めます。」私の答えで良かったのかどうか、師は何も言いませんでした。その夜、師から坐禅のやり方を教わりました。

妙心寺僧堂から瑞巖寺僧堂へ、そして老師へ

瑞龍寺で承天老師の弟子となった佐々木承周師は、その後、瑞龍寺に籍を置いたまま京都花園中学、東京駒澤大学予科などに学んでいる。そして二十八歳の頃（昭和十年頃）、妙心寺僧堂に掛搭



(かとう)修行のため僧堂に入ること) している。注3 この頃瑞龍寺には、承周師を含めて五人の雲水がいた。注4 檀家との間にも、全員が親しく和やかな交流が続いていた。

注3 財団法人 仏教伝道協会『第30回仏教伝送文化賞』平成八年

注4 当時の状況については、本書第二章一節に詳しい。

昭和十年(一九三五)は、松原盤龍老師のご病氣のため、三浦承天老師が瑞巖寺僧堂の師家代行として、瑞龍寺から松島瑞巖寺僧堂へ移られた年である。この二年後、昭和十二年には、承天老師が瑞巖寺に晋山され、正式に瑞巖寺僧堂の師家に就任される。この年、承周師は妙心寺僧堂から瑞巖寺僧堂へ転錫(てんしゃく)僧堂を移ること) している。

昭和十九年(一九四四)二月に、佐々木承周和尚は瑞巖寺の副司に就任する。

承周和尚三十七歳の頃である。そして昭和二十二年(一九四七)には、承天老師の印可を受けられる。三浦承天老師の下で苦節研鑽すること十年にして、晴れて承天老師の法嗣となられたのである。承周老師四十歳であった。

既に本書第二章一節に記したが、この頃瑞巖寺では、明治年間から国の特別保護建造物に指定されている、本堂・御成門・中門・回廊などが、国からの助成も貰って大修理に入らなくてはならなくなった時期であった。いわゆる「昭和の大修理」である。副司として承周老師は、この件の責任者でもあった。

そして更に昭和二十四年(一九四九)の暮十二月には、承天老師が大本山妙心寺の管長に就任されることになる。瑞巖寺は副司としての承周老師に任せ、僧堂は承周老師に代参(だいさん)師家代

行)させて、承天老師は本山住まいに入られたのである。

この頃、承周老師は、瑞巖寺の塔頭陽徳院の住職となっておられる。そしてその時期、陽徳院の中に幼稚園を開かれたというのである。瑞巖寺の塔頭陽徳院での幼稚園経営とは、当時としては考えてはみても中々踏み切れないことであつたらしい。周囲は驚きの眼を見張つたと伝えられている。

また瑞巖寺の副司時代承周老師は、松島海岸をヨット・ハーバーにしようと企画したこともあつたと聞く。承周老師という方は、現状から一歩外に出て考えることの出来る方であり、また行動力も、人並みはずれたものを持つ方であつた。

### 瑞巖寺事件と老師の渡米決定

承周老師のこの性格が災いしたのであろうか、老師は昭和二十七年(一九五二)に刑事事件を起こしてしまわれる。いわゆる「瑞巖寺事件」である。悪い人間にそのかされたともいわれるが、瑞巖寺として住職を本山に送り出していることは、有形無形にかなりの資金が必要であつたことは十分考えられる。加えて現在の瑞巖寺とは違って、財政的には脆弱だった当時の瑞巖寺の副司職である。寺のために何とかしなくてはならないという焦りが、悪い人間につけこまれた事件だったのではなからうかと、筆者は理解している。しかし正確なことは瑞巖寺にも資料はなく、不明という他はない。

警察が拘束に来た時、承周老師は『私一人でやったことだ』と話され、拘留室では静かに結跏趺





図166 古川大航管長猗下

坐（けつかぶざ）坐禪を組むこと）しておられたと聞く。注5

注5 宮城県塩釜 東園寺住職 千坂成也師談

この事件のために三浦承天老師が管長を辞任されたことは、本書第二章一節に記した。

昭和二十八年（一九五三）、承周老師は瑞巖寺陽徳院を去って、長野県飯山の正受庵に移った。正受庵は、白隠禪師の師 正受老人（道鏡慧端）の開いた寺で、白隠禪師がここで悟りを開いたとされる名刹である。承周老師は、荒れ果てていたこの由緒ある名刹の復興に尽力する。

しかし、刑事事件を起こした承周老師に対して、仏教界の風は冷たかった。その寒風の中で、禪僧としての力もあり、先見力も行動力もあるこの老師に目をつけた方があった。三浦承天老師の後を受けて、妙心寺派の管長になられた古川大航老師である。古川大航老師は昭和三十五年（一九六〇）に、現職の管長でありながら渡米して、数ヶ月間滞在して禪の伝道活動を行っておられる。それだけ妙心寺の禪をアメリカに広めることの重要性を痛感しておられたのであろう。帰国された老師は、佐々木承周老師にアメリカでの布教を命じられたのである。

この任務を全うするには、二度と日本には戻らないという覚悟が必要だった。悲愴な決意のもと承周老師は『アメリカに禪を根付かせるまでは死ねない』と宣言をして、アメリカ行きに踏み切るのである。





**松本 篤二**（まつもと とくじ）

1929年、札幌市に生まれる。北海道大学理学部物理学科を卒業。文部教官 北海道大学理学部助手を経て、一橋大学商学部経営学科に国内留学。1957年、札幌市 日の丸産業社に入社。常務取締役、専務取締役を経て、1983年、同社を退社。同年（株）リクルート所属 企業内教育トレーナーとなる。1999年、退社。

この間、1977年、宗教法人瑞龍寺責任役員総代。1983年、いったん退任するが、1996年、兼務住職平野宗浄老師のご要望により再び責任役員総代に復帰、今日に到る。

**志の寺**

**瑞龍寺・北海道場百年史話**

平成二十一年（二〇〇九）八月三十一日発行

編著者 松本 篤二  
発行者 松本 篤二

札幌市中央区北七条西十三丁目二十八―一五二  
郵便番号 〇六〇―〇〇〇七  
電話番号 〇一一―三二一―二七四

印刷所 山藤三陽印刷株式会社